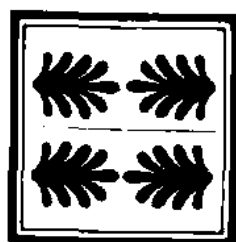


この地球に生れあわせて

湯川秀樹

講談社文庫



講談社文庫

この地球に生れあわせて

湯川秀樹

昭和50年1月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 有限会社千曲堂

© Hideki Yukawa 1975

Printed in Japan

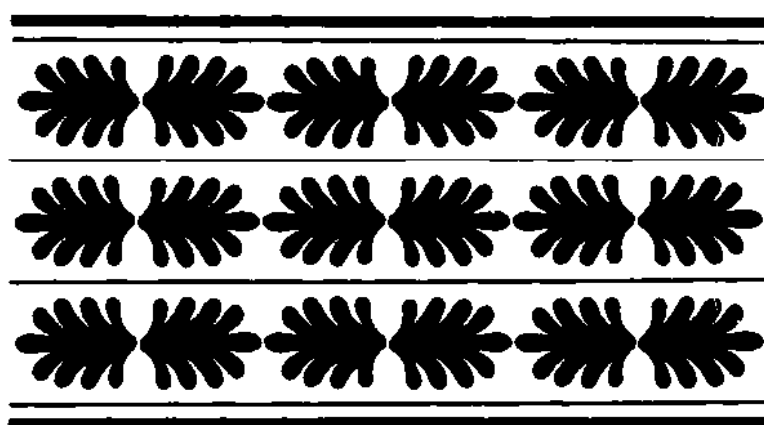
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

この地球に生れあわせて

湯川秀樹



講談社

目次

第一部

私の生きがい論——創造性と自己制御——

この地球に生れあわせて 132

考え方を変えること 148

一人の「世界」みんなの「世界」 165

歳をかさねること 170

第二部

遍歴 210

四国の旅 215

欧米紀行 218

故国に帰りて 233

アメリカ便り（第一信）
236

プリンストン便り
240

スウェーデンの思い出
244

ハドソン河畔の秋
249

静かな町にきて
255

アメリカ大学教授の生活
258

イタリアの夏
264

外から見た日本
267

解説 市川亀久彌
289

あとがき 湯川秀樹
297

年譜
300

著作目録
306

この地球に生れあわせて

第一部

私の生きがい論——創造性と自己制御——一九七〇年——

第一講

生きがいというのが、このゼミナールの全体のテーマなわけですが、生きがいということについて、二回も三回もかかって、なにか学問の講義でもするようにお話するのは、実にむづかしいことです。それに皆さんは何人かの講師のお話をお聞きになるわけですから、私がお話することは、あるいは、いままでに皆さんがお聞きになったことと重複したり、矛盾したりするかも知れない。それはなんともいまのところ、よくわからない。わかったところで、私は私のいいたいことをいうだけです。適当に参考にしていただきたいと思います。

生きがいにも内と外

そもそも生きがいということになりますと、人はそれぞれ生きがいを感じて生きている。私も私なりに生きがいを感じて生きてきたのですけれども、しかし年がら年じゅう大いに生きがいを感じておったわけではないのです。やっぱり人生がいやになることがあるんですね。ですから何とかして、自分の人生を少しでも意義あるものになりたいと努力を続けている。それぞれの人の心の持ちかたにしても、いろいろの人の話を聞くのもよろしかろうが、いずれにせよ、自分でいろいろ思い直してみても生きているわけですね。あんまり思い直さずに、ずっと一生、いつも生きがいを感じながら生きられたら、こんなにはいいことはないんですけれども、そういうふうにはいきません。いろんなことに突きあたって悲観したりしながら、また氣をとり直して生きている。ゆく、そういうものでしょうね。

私は学問をずっとやってきましたが、自分では大変しあわせな人間だ、自分なりに、非常に生きがいのある人生を送ってきた、というふうに思っております。そういう私なりの生きがい論なるものを、自分なりに考えてみているわけなんです。私の講演には「創造性と自己制御」という大変むつかしい副題をつけましたけれども、あまり題目にこだわっていただくことはないと思います。

人生というものの、人間の生き方はいろいろあるけれども、そこに創造的な、なにかを創造す

る——芸術家であれば芸術的作品、美術であつても小説であつてもそれは創作ですね、また私たち学者であるならば、やはりなにか新しい真理を発見する、技術者であるならば、いままでになり、新しい性能を持った機械を発明する、そういうようなことができれば、一番生きがいを感じられるわけですね。

そういう場合に問題をしばつてみますと、生きがいというのは、内側と外側が必ずあるんだと思います、程度の違いはありますが。内側というのは自分、主観とか主体とかいつてもよい。外側は客観とか客体。狭くいえば自分と他人——他人というのは複数で、社会とか人類とかに拡げててもよい。とにかく内外の両方あるわけですね。生きがいを感ずるということは自分が満足する、自分のやりたいことをやるということだけのように見えておりまして、実はそうではない。自分のやつていることが人のためになる、という大変聞えがよろしいけれども、むしろそれよりは、ほかの人に認められたい——こういう気持は必ずある。そういう気持が全然ないという人があつたら、私はそれは多分うそだろうと思います。

たとえば私は物理学をずっとやつてきた。これはだれのためにやっているのでもなくて、自分のためですね。これは別にうそじゃないんです。『論語』に「いにしえの学者はおのれのためにし、いまの学者は人のためにし」という文句があるんですが、いにしえというのは、孔子にとつての昔はよかった、いまはアカンぞという発想ですね。昔は自分が学びたいから学んで、いまは人のために——という意味は、極端な場合には、立身出世になつてしまふかも知れないが、もう少し広くとれば、なにか見栄で学問する。そういうことで学問をやつてもアカンぞ、と戒める

ためにいったんですね。しかし昔もいまも、おのれのためと人のための両面は必ずある。

私は物理学をやった。これは自分のために違いなければ、しかし同時に自分がなにがしか新しい真理を発見し、それが人に認められるようになりたい——と思うわけですね。もう少し別な言葉で表現するならば、自分としてなにかをなしとげたという満足感、そしてやったことになにか客観的な価値があるということの両方があって、はじめて、ほんとに生きがいを感じるわけです。それが当り前のケースです。

しかしながら、生きがいというものはそういうふうに限れないということもあります。自分の理想通りに生きられたらいいと思っても、現実には全く違った生き方をしなければならぬことがある。たとえば釣りに生きがいを感じる、自分の日々の仕事は一つも面白くない、だから休みがあれば釣りに行く。自分の毎日の仕事よりも、釣りをしていることの方によっぽど生きがいがあるという場合もあるわけです。

私は別にそれをいいとか悪いとかいつているんじゃない。しかし、できうべくんば、仕事の方にも生きがいがあるのがいいでしょうね。私はなにも人それぞれの生き方をとやかくいうつもりはないけれども、もし自分のやっている仕事自体に生きがいを感じられたら、誰にとっても、その方がむろんいいに違いない。私がしあわせな人間だと思ふのは、自分のやっていることに生きがいを感じることができたからです。そこには創造ということがある。あわよくばなにか新しいものを創造できる。そういう喜びを、たまには味わうことができる。それは時々しか味わえないもので、あとはきょうもうまいかん、あすもうまいかんという状況でありますけれども、た

まには創造の喜びというのを味わえるのは、大変しあわせな人間だと思います。だれでもそういうふうになうまく行くとは限らないことも、私にはよくわかつているから、運がよかったのだと思うのであります。

他人に迷惑かけない

運といえば、時代が違うということもあります。とくに近ごろは、世代の違いが問題になります。たとえば、二十代の人たちは私たちとは一世代以上違う。そこには非常に大きな断絶がある、ということが、この二、三年来、しきりといわれてきたのであります。ところが、ひと月余り前、朝日新聞の三月二十六日の新聞の朝刊を見ていましたら、二十代のサラリーマンの意識調査のよなものが出ておりました。これは面白そうだと思ったので、読んでみまして、いろいろ感ずるところがあつたのでありますが、その中には、私が見ましても、断絶どころか、まことにもっとも、と思われるようなことが、たくさん書いてあるのです。

たとえば「人間の理想的な生き方というのはどういうものか」という質問に対しての答えはいろいろありますけれども、そのひとつとして「他人に迷惑をかけずにやりたいことをやる」ということを書かれた方がありました。まことにもっともですね。こういうことを思っている方が相当おられるらしいということを知って、たいへん心強く思つたのであります。

しかし世の中は、新聞とかテレビとか、そういうものを通して見ておりますと、若い人たちの

中で、こういう考え方と非常に違う行動をする人ばかりが目立つわけです。人に迷惑をかけるようなことでもしなければ生きがいを感じられん、というような考え方をしてるんじゃないか、と思わせるような事件が次々と報道される。一体どうなったのかと、心配する。ところが本当は、多分、二十代の皆さんの多数は、やっぱりなるべく他人に迷惑をかけずに、自分のやりたいことをやるという考えらしい。私もそう思つて学問をやつてきたつもりなんです。

もしも自分のやりたいことを是が非でもやろうとしたら、他人に非常に迷惑がかかることであるならば、これは大いに考え直す必要がある。私の場合、学問するということとはあまり迷惑をかけずにやれるから、やつてきたということもあるわけです。ところが、学問をすること自体にも、なかなか簡単でない、いろいろむづかしい問題を含んでいることが、だんだんとわかつてきたのですが、それは今ここで立入ることはやめます。

朝日新聞の調査の話を、もう少し続けますと、へ理想的な生き方について、の答への中にへ死んでのちに、どこかに私という人間が生きていたという足跡を残したいというのがあります。これもまことにもっともな気持ですね。自分が精いっぱい生きる、別に死んでから足跡なんか残らなくてもいいじゃないか、そういう気持の方がすっきりしてるようですが、実際は、人間というものはそういうもんじゃないですね。

さきほどから申しておりますように、内と外とがあるんですね。なにか人に認められたい、仮に認められなくても人にわからなくても、少なくとも、これはやっぱりみんなが認めなければならぬ真理である、そういうものを発見したいという気持は、学者なら必ず私はあるんだと思ひ

ます。本当の生きがいというのは、そういうところから出てくるのであろうと私は思っているの
で、今の答えを見て、まことに話がよく通じると感じたのです。こういうところには断絶はあり
ませんね。

それから、ちょっと問題が違いますが「理想的な社会とはなにか」について、いろいろな答え
が書いてある。その中で大変感心しましたのを一つ。「三角形の底辺にある人たちが苦しくなく、
頂点にある人たちが悪いことをしない社会」、入学試験の模範答案みたいで、いいに決っている
んですが、「頂点も底辺もない社会」といわないところが面白い。理想としては大変ひかえ目な
わけですが、昔からこういう社会はあまりなかった。たまに、これに近い社会がありますと、大
変いい時代だったと、後世までいわれるんですね。

もう一つ「合理主義に徹し、かつ潤いのある社会」という答えがある。これも模範答案です
ね。しかしこういうふうにはうまくいかない。合理主義に徹するというのと、かつ潤いのある社
会というのが両立するか、というのが問題です。もう一つ模範答案「底辺を完全に保障した上で
の自由競争の社会」、これもなかなかこの通りいかない。

私がこういうものを引用した理由は、私のような年代のものと、三十年、四十年の隔りのある
若い諸君との間には、いちがいに断絶があるなどというのは、おかしい。あるところにはある――
私と若い年齢のある人と比べてみれば、全然断絶してるかも知れない。たとえば大学を出て大い
に研究をしている、頭のいい人で、まじめな熱心な研究者だと思っている人が、漫画を読むのが
好きなんです。暇さえあれば漫画を読んでいる。これには私は断絶を感じますね（笑声）。なか

なか理解できん。私にはこのごろの漫画は、全然わからんのが多い。だから、はなはだしい断絶を感じるのです。しかし、それは深刻にとらなくてもいいかも知れない。

そういう、いろいろなことがあるわけですが、とにかく私は今日から三回に分けて生きがいの話をしなければならぬ。私は私なりに、自分が体験してきたことをもとにはしますが、自分が理論物理学者でありますから、なんでもかんでもなんとか理屈をつけるというか、なにかある普遍的な法則という形にまとめて、そういう法則を媒介としてこの自然界を理解するというのが本職でありますから、やはり自分の体験だけでなく、どういう学者がどういうことをしたとか、いろんな人の書いたものもありますから、それらを参考にして私なりに、創造論というようなものを、なんとかまとめて、それができるだけ多くの人にあてはまるようにする。そういうつもりで話をすれば、皆さん参考になるというか、より生きがいのある生活をする、より創造的に生きることの助けになるだろうと、思うわけです。

激動の時代にこそ

しかし、何といっても、こういう話は体験の裏づけがなければだめですね。よそごとではどうにもならない。ところが、自分の体験というのは、そんなに豊富じゃないんです。だれでも創造の体験は豊富じゃない。つまり人間が非常に創造的な活動で成功するということはめったに起らない。めったに起らないから貴重なのであって、平常は同じことの繰返しです。